序

「エコーは難しい」

同業の整形外科医から，この言葉を何度耳にしてきたことだろう．ほかならぬ私自身も，かつてそう思っていた当事者だ．はじめてプローブを手にしたとき，画面に映し出される白黒の像が何を意味するのか，まるで見当がつかなかった．試行錯誤のなかで助けとなったのが，書籍『CT・MRI画像解剖ポケットアトラス　3巻　脊椎・四肢・関節』（メディカル・サイエンス・インターナショナル）であった．MRI画像と対応するイラストが見開きで掲載されたこの書籍を傍らに置き，整形外科医として日常的に読影していたMRI画像と目の前のエコー画像を照らし合わせることで，少しずつ確実に，エコー画像の読み方が身についていった．MRI画像とエコー画像を直接対比できる教科書があれば――かつての私の思いが，本書の原点である．

運動器エコーは近年，急速な技術革新とともに発展・普及が進んでいる．しかしながら，運動器診療に携わる医療者の間でエコーを日常診療に活用できているものはいまだに多数派ではない．その最大の障壁は，エコー画像が「読めない」「解釈できない」という点だ．「エコーは難しい」の本質は，エコーそのものの難しさではなく，観察対象の解剖をエコー画像として認識できるかどうか，という解剖理解の問題に帰着する．解剖が正確にイメージできるかが，エコー習得の鍵である．

近年，理学療法士によるエコー活用が急速に進み，医師と理学療法士がエコーという「共通言語」をもとに協調して診療を行うチームアプローチが，ホットなトピックの一つとなっている．しかし理学療法士から「MRIの画像が読めなくて苦労している」という声を多く聞く．MRI読影は医師の領域であり，理学療法士が体系的に学ぶ機会はきわめて限られているためだ．本書はエコーとMRIを常に対比しながら解剖を学ぶ構成であり，MRIに慣れた医師がエコーへと歩み寄るアプローチであると同時に，エコーを入り口としてMRIの読み方を習得できる双方向の教科書でもある．理学療法士にとっても，確かな学びの場となるはずだ．

キヤノンメディカルシステムズ社のSmart Fusion機能を用い，全身の部位にわたってエコー画像とMRI画像をリアルタイムにフュージョンし，運動器全領域をエコーとMRI双方で確認できるアトラスとして体系化したのが本書である．MRIに慣れ親しんだ整形外科医であればMRI画像を手がかりにエコー画像が読み解け，エコーを扱う理学療法士であればエコー画像を手がかりにMRI画像が理解できるようになる．

エコーができるようになると，診療が変わる．体内の構造がリアルタイムに動態として眼前に立ち現れ，診断の精度が上がり，治療の根拠が明確になる．診療が変わると，患者さんが変わる.「痛みがとれた」「動けるようになった」という実感が生まれ，患者さんの人生が変わる．患者さんの人生が変わるとき，医療者の人生もまた変わっている．エコーを活用できていないすべての医師・理学療法士・医療者にとって，本書は人生を変える教科書になるはずである．本書を手に実際の臨床でエコーを使うようになって，こう思うことだろう.

「エコーはもう，難しくない」

結びにあたり，撮像にご協力くださったキヤノンメディカルシステムズ株式会社の稲見様・佐野様をはじめとするスタッフの皆様，こだわりの強い筆者に根気よく向き合い発刊まで導いてくださった羊土社の阿部様・鈴木様・大家様をはじめとするスタッフの皆様に，心より感謝を申し上げます.

2026年4月

TAO Clinic
面谷　透